



世界を教えて心豊かな国際人を育てよう

小学校から開発教育を

紺野 美沙子

国連開発計画
親善大使



を考えるきっかけを与えるだろう。
私はずっと途上国で電気も水もない、治安も良くない最貧困の暮らしを強いられる人々を目の当たりにして、日常のささやかなこともありがたいと感じられるようになった。たくさんのモノと情報にあふれた日本では、無いモノを想像する方がむずかしい。しかし途上国の現実を教えることで、自分たちに与えられているものに気付き、感謝する気持ちも生まれるのだと思う。

途上国で自分たちと同じ年ごろの子どもたちが、困難にめげず一生懸命に生きる姿を伝えるだけでも意味がある。私自身、訪問した先々で人々が貧しさや病気、環境悪化にも負けずに真摯に働く姿を見るたび、深い共感を覚えた。感受性豊かな子どもたちはなおさら、海外でたくましく生

国連開発計画(UNDP)親善大使に就任して今年で12年になる。これまで8カ国を公式訪問し、日本では当たり前のごとでも途上国では違ふということを経験し、実感してきた。

途上国で見て、感じたことを国内各地で伝えてきたが、次第に未来を担う子どもたちこそ世界のことを知ってほしいと思うようになった。早くうちから世界を学ぶことで、自分たちのことを客観的

に考えられ

るだけでなく、自ら行動を起こすきっかけになると期待するためである。

たとえばアフリカの多くの国々では女性たちが毎日、何キもの道を歩いて水くみをして

候変動の影響で水が手に入れにくくなった。その結果、女児が母親の手伝いをせざるを得なくなり、就学率が下がることが懸念されている。

その原因のひとつが私たち

が排出してきた二酸化炭素だ。アフリカで同年代の子どもの生活に影響していることを日本の子どもが学べば、より具体的な行動につながる。また、最近小学生からインターネットを使うことが珍しくないが、途上国で使える人は13%しかない。情報にアクセスできなければ、それを使ったビジネスもできず格

差はますます広がってしまふ。私が03年に訪問したガーナでは、UNDPがパソコンを積んだバスを走らせ、地方にある学校の生徒が熱心に電子メールを打つ練習をしていた。日本の子どもにも身近なパ

ソコンの話を通じ、海の内うにいる同年代の子どもたちに思いをはせ交流ができれば、インターネットはまさに世界の「窓」になる。欧州では、こうした途上国の現実を子どもたちに教え、さまざまな角度から考えさせる「開発教育」を実践している英国やオランダなどの国がある。早いうちから国際理解を深めることは、資源や食料の多くを海外に依存している

日本にとって大事なことだとも思う。さらに、世界の現実を知ることは、子どもたちに自分の暮らしを見つめる機会を与え、生きる上で大切なこと

候変動の影響で水が手に入れにくくなった。その結果、女児が母親の手伝いをせざるを得なくなり、就学率が下がることが懸念されている。

この・みさこ 俳優。98年からUNDP親善大使としてカンボジアなど8カ国を視察、東ティモールの植林支援などを行う。著書に「ラララ 親善大使」(小学館刊)。